

Title	<研究論文>欧州における大学国際化の評価支援に関する 取組: 国際化評価の目的・手法・指標に関する考察
Author(s)	渡部, 由紀
Citation	京都大学国際交流センター 論攷 (2013), 3: 23-41
Issue Date	2013-02
URL	http://hdl.handle.net/2433/187060
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

欧州における大学国際化の評価支援に関する取組

—国際化評価の目的・手法・指標に関する考察

渡部 由紀

要 旨

高等教育市場のグローバル化が進み、国際化は大学改革の重要課題となった。国際化が大学の質の改善と向上に不可欠な手段と認識されるようになり、国際化評価に対する取組が欧州で進んでいる。本稿の目的は欧州で最近開発された国際化評価の支援取組を分析し、国際化評価の目的、手法、指標の特徴と課題を考察することである。国際化の評価は自己点検と改善を主目的としているが、大学には第三者から大学の国際性（国際性の高い大学）の認定を受け、大学のプロファイル向上に役立てたいという副次的目的もある。評価方法は各大学が設定した目標に対する自己言及的なプロセス評価であるオーディットが主流である。比較的なアプローチを取り入れたベンチマーキングの使用も模索されているが、国境を越えた大学間の比較には課題も多い。評価指標は多様なタイプの高等教育機関の国際化の目的や目標に対応した包括的な指標セットが開発され、今後の国際化評価に寄与することが期待されるが、目標達成に有用な指標選択の支援方法は今後の課題である。

【キーワード】大学の国際化、評価、オーディット、ベンチマーキング、評価指標

1. 大学国際化と評価の先行研究

今日、国際化は大学にとって周位的・補足的な課題から、大学の発展に影響を与える中心的な課題となっている。かつて大学の国際化と言えば、教育や研究に関する個々の国際的な活動の集積を意味したが、今では大学の質を向上させるために組織として戦略を立てて取り組む課題を指す。Knight (2003) は、国際化とは「高等教育の目的、機能、提供の在り方に国際的、異文化的、またはグローバルな次元を統合していくプロセス」だと定義する (p. 2)。Kerr (1990) は、現代の大学は国の行政的また経済的利益のために努めるだけでなく、国家的アイデンティティーの発展に不可欠な要素として発展してきた国家大学 (a nation-state-university) であり、21 世紀にその国家大学からコスモポリタン国家大学 (a cosmopolitan-nation-state university) への変革が必要であると述べている (p. 9)。高等教育市場のグローバル化の現状に直面する世界の多くの大学にとって、国際化とはこれまでの大学の在り方を問う組織的変革のプロセスと言える。

1990 年代から国際化のプロセスをどう理解し、また国際化の質をどう検証するべきかという研究が進められてきた (Ashizawa, 2006; Davies, 1995; de Wit, 2009; de Wit & Knight, 1999; Ebuchi, 1989;

Ellingboe, 1999; Green & Olson, 2003; Mestenhauer, 2002; Nilsson, 2000; Paige, 2005; Watabe 2010 など)。また、大学が国際化の実施プロセスを評価するための実質的なツールとガイドラインの開発も進められてきた。1990年代半ばから試行的な実施を経て、1999年にOECD/IMHE（高等教育機関管理プログラム）とACA（ヨーロッパ学術協力協会）が開発したInternationalisation Quality Review Process（国際化の質の評価プロセス）や米国教育協議会（以下ACE）のInternationalizing the Campus: A User's Guideは広く知られている。

欧州では、欧州高等教育圏の構築を目指し、1999年のボローニャ宣言からボローニャ・プロセスが実施され、現在2期目（2011-2020年）に入っている。欧州では高等教育の学位構造と学修課程を共通化し、教育の透明性と互換性を高め、学生の国際的流動性を促すための施策が実施されてきている。欧州委員会は高等教育の国際化と質の向上を促進する機会を欧州の高等教育機関に多く提供してきた。国際化が高等教育改革の中心課題となる昨今、欧州では大学が国際化を評価するのを支援する取組が活発になっている。本稿では欧州で最近開発された5つの大学の国際化評価ツールやサービスについての調査結果を基に、大学国際化の評価の特徴と課題について考察する。

2. 大学国際化の評価支援に関する取組——欧州の5事例

大学国際化の評価の特徴についての考察にあたり、まず調査した5つの大学国際化の評価ツールやサービスの事例について報告する。今回調査した5つの事例は、オランダ高等教育国際協力機構⁽¹⁾（以下Nuffic）のMapping Internationalisation（以下MINT）、欧州委員会の支援プロジェクトであるIndicators for Mapping and Profiling Internationalisation（以下IMPI）、ドイツ大学学長会議⁽²⁾（以下HRK）のHRK-Audit Internationalisation of University（以下HRK-Audit）ユネスコの諮問機関国際大学協会⁽³⁾（International Association of Universities：以下IAU）のInternationalization Strategies Advisory Service（以下ISAS）、ヨーロッパ学術協力協会⁽⁴⁾（Academic Cooperation Association：以下ACA）のACA Internationalisation Monitor（以下AIM）、である（表1）。全てのツールやサービスが2010年前後に開発されており、欧州の高等教育機関の国際化評価に対する関心の高まりが見られる。

調査方法は、評価ツールやサービスのホームページを含む文献調査と評価ツールやサービスの提供者（開発者）へのインタビューである。IMPIとISASについては、利用者へのインタビューも行った。IMPIは2機関で各1名、ISASは1機関2名である。インタビュー調査は、5事例のうち4事例は2011年に、1事例（HRK-Audit）は2012年に実施した。IMPIは開発途上にあつたので、2012年にフォローアップインタビューも実施した。

表1 欧州の大学国際化の評価支援に関する取組事例

評価ツール・サービス	提供者（開発者）	開始年度
Mapping Internationalisation (MINT)	Nuffic（オランダ高等教育国際協力機構）	2009年 (2008年)
Indicators for Mapping and Profiling Internationalisation (IMPI)	欧州委員会の支援プロジェクト <ul style="list-style-type: none"> ■ ACA（ヨーロッパ学術協力協会） ■ CHE Consult（ドイツ） ■ Campus France（フランス） ■ Nuffic（オランダ） ■ SIU（ノルウェー） ■ Persktwy（ポーランド） 	2009～2012年
HRK-Audit Internationalisation of Universities	HRK（ドイツ大学学長会議）	2009年
Internationalization Strategies Advisory Service (ISAS)	International Association of Universities (IAU: ユネスコの諮問機関国際大学協会)	2010年
ACA Internationalisation Monitor (AIM)	Academic Cooperation Association (ACA: ヨーロッパ学術協力協会)	2011年

2.1 5事例の概要と比較

今回調査した5つの大学国際化の評価ツールやサービスの特徴を比較する（表2）と、その取組は3分類することができる。まずHRK-Audit、ISAS、AIMは自己評価と専門家のピア・レビューによる国際化の質の向上のためのコンサルティングサービスである。これらの評価・助言サービスでは国際化の評価の主体者は大学であると捉え、大学が国際化の現状を理解し国際化を今後さらに推進できるよう、専門家として助言を提供することを目的としている。大学国際化の評価プロセスを支援する専門家としての役割を、ファシリテーター、また大学の「批評的な友人」⁽⁵⁾と捉えており、大学の国際化の程度を判定する外部機関とは異なる立場にあることを明言している。

二つ目の取組はMINTであり、これは国際化プロセスの観察（モニタリング）と自己評価を支援するオンライン・ツールの開発と提供である。MINTのオンライン・ツールは、オンライン上で提供される国際化の自己評価質問票である。質問票は組織機関（大学、学部・研究科や国際ナショナル・オフィスなどの部局、専攻部門）レベルとプログラムレベルと二種類あり、1) 国際化の方針と目標、2) 国際化の取り組み、3) 国際化の基盤支援、4) 国際化の主要データの4分野から成っている。国際化の取組と基盤支援については、実施の程度を問うPDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクルを検証する質問になっている。

オンライン上の質問票に従ってデータを入力すると、国際化の現状が表や図などに整理された自己評価報告書が自動作成される。自動作成された報告書には、出力されたデータについての説明等の追記が可能である。更にMINTでは入力データがある一定期間保存することが可能であり、各大学は複数年度に渡る自己評価分析が可能となる。但し、この自己評価報告書は、あくまでも入力したデータの記述的統計結果である。オンライン・ツールでは専門的な分析や解釈の提供はできないが、別途コンサルティングサービスとして2012年より有料で提供されている。

表2 欧州の大学国際化の評価支援のツール・サービスの比較

評価ツール・サービス	取組内容	評価の種類	評価レベル	評価にかかる期間	支援の対象
HRK-Audit Internationalisation of Universities	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学が国際化を自己評価し戦略的に国際化を促進するためのコンサルティングサービス ● 再オーディットサービス 【有料】 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自己評価 + ピア (第三者) レビューと助言 	機関	1年程度	HRK (ドイツ大学学長会議) のメンバー-高等教育機関 【無料】
Internationalization Strategies Advisory Service (ISAS)	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学が国際化を自己評価し戦略的に国際化を促進するためのコンサルティングサービス 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自己評価 + ピア (第三者) レビューと助言 	機関	1年程度	主対象はIAUのメンバー-大学 (IAUのメンバー以外も可) 【有料】
ACA Internationalisation Monitor (AIM)	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学が国際化を自己評価し戦略的に国際化を促進するためのコンサルティングサービス 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自己評価 + ピア (第三者) レビューと助言 	機関	3 ~ 4 か月	主対象は欧州の大学 (欧州外の大学も場合によっては可) 【有料】
Mapping Internationalisation (MINT)	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学の国際化戦略作りと国際化プロセスの観察と評価のためのオンライン・ツールの提供 ● 2012年より大学が国際化を自己評価し戦略的に国際化を促進するためのコンサルティングサービスを追加 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自己評価 ● ピア (第三者) レビューと助言 (2012年より可) ● ベンチマーカーング可 	機関とプログラム		オランダの高等教育機関 【無料】 コンサルティングサービス 【有料】
Indicators for Mapping and Profiling Internationalisation (IMPI)	<ul style="list-style-type: none"> ● 包括的な国際化の評価指標セットの提供 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自己評価 ● ベンチマーカーング 	機関とプログラム		プロジェクトの主対象は欧州の大学 ツールは世界の高等教育機関が利用可 【無料】

MINTの主目的はオランダの各大学が自ら設定した国際化の目標に対して、その進捗状況を自己評価するためのツールの提供であるが、自己評価報告書に加え、他大学、他部局、他プログラムと比較する比較レポートや類似した組織やプログラムの平均データと比較するベンチマークレポートの作成も可能である。しかしながら、実施にはいくつかの課題がある。比較レポートは比較する双方の大学の合意が必要である。また、ベンチマークレポートでは類似した大学の国際化の平均値とのベンチマーキングになるため、十分な数の組織またはプログラムのデータの集積が不可欠である上、統一した定義に基づいたデータを収集しなくてはならないという難しい課題がある。

MINTでは当初オンライン・ツールの提供のみで、国際化の評価活動への助言は行っていなかった。しかし2012年から有料でHRK-Audit、ISAS、AIMと同様に専門家としての助言も提供するようになった。従って、MINTが提供する支援内容はHRK-Audit、ISAS、AIMとIMPIと同種のものであると言えるが、その対象はオランダの高等教育機関に限られている。またMINTを開発したNufficが高等教育機関の教育分野の支援を目的とした機関であるため、MINTは大学の国際化の中でも教育機能を対象とした評価になっている。

最後の取組はIMPIであるが、これまでに述べた4つの評価サービス・ツールとは支援の目的が異なる。IMPIは欧州委員会の支援を受けた3年間のプロジェクトであり、国際教育交流推進の役割を担う6機関、ドイツのCHE Consult、オランダのNuffic、ACA（ヨーロッパ学術協力協会）、キャンパス・フランス、ノルウェーのNorwegian Centre for International Cooperation in Education(SIU)、ポーランドのPersktwyが携わった。このプロジェクトの目的は国際化の評価指標セットを構築し、大学の国際化の自己評価またはベンチマーキングのためのツールボックスの開発にある(Brandenburg et al., 2009)。具体的には、オンライン上で各大学が自大学の国際化の目標に適した評価指標が選択できるよう489指標を9分類した包括的な国際化の評価指標セットと評価指標の選択を補助するガイドランの提供である。IMPIは完全なオープンツールであり、インターネットへのアクセスさえあれば、世界中全ての大学が利用できる。

国際化の評価指標セットの開発は文献調査に基づいて作成した指標セットを欧州の大学で2回テストしている。テストではその指標セットを使用して、自己評価とベンチマーキングを行っている。1回目のテストでは30大学が参加し、700ほどあった指標を300程度に絞り込み、1回目のテストを経て選定された指標は新たな20大学でテストされている。最終的な国際化評価指標のセットは、欧州の他の二つのプロジェクト、Erasmus Mobility Quality Tools (EMQT) プロジェクト⁽⁶⁾とIntelligent Manufacturing System (IMS) 2020⁽⁷⁾の結果も反映され、2012年11月現在で489指標となっている。

IMPIでは前述したように多様な大学が目指す様々な国際化に応えられるよう包括的な指標を提供しているが、その膨大な指標から有用な指標を選択するのは容易ではない。そこでIMPIでは評価指標の選択を支援する3つの機能を設けている。まず評価指標の選択において、選択範囲を1) 全評価指標、2) 各目標においてこれまでに選択されたことのある評価指標、3) 各目標においてこれまでに最も選択された評価指標と3段階設けている。最初から「全評価指標」から適切な指標を選択するのが難しければ、「最も選択された指標」を参考にすることが可能である。また選択肢を広げれば、「これまでに選択された評価指標」を参考にできる。次に国際化の目標達成における評価指標の妥当性を評価する機能がある。選択した評価指標が国際化の目標達成にどの程

度関係していたかを評価する機能があり、評価指標には IMPI 利用者の評価平均が表示されている。最後に IMPI のホームページで年間最優良評価指標が発表される。IMPI では国際化指標の選択において、まず国際化戦略の5つの目標から該当大学の目標の設定が求められる。この各目標の達成において、最も選択され、またその妥当性が高いと評価された指標のトップ10が提示される。IMPI は先行研究の結果を踏まえ、多様な高等教育機関の国際化に対応した最も包括的な指標を提供し、指標選択に必要なガイドラインの開発に努めている。

本節では、大学国際化の評価の特徴と課題について考察するにあたり、近年欧州で開発された5つの大学国際化の評価ツールやサービスの特徴を比較し、その類似点や相違点について論じた。

3. 大学国際化の評価についての考察

欧州における大学国際化の評価ツールやサービスの5事例の調査結果を基に、近年の大学国際化の評価の特徴と課題について考察する。ここでは5事例すべてが実施していた機関レベルの評価について議論する。考察課題は調査結果の分析から明らかになった3つのテーマ、国際化の評価目的、評価手法、評価指標である。

3.1 国際化の評価目的

なぜ大学は国際化を評価するのか。国際化の評価は今のところ、アクレディテーションや認証評価のように大学にとって義務化された評価ではなく、大学の選択的評価である。従って、大学が国際化評価を実施する目的、またはインセンティブについて理解することが重要である。今回の調査結果から、大学が国際化の評価を実施する目的は主に二つ考えられる。第一の目的は自己点検・改善である。大学は国際化をその質の向上にとって不可欠な手段として重視するようになり、より戦略的に国際化に取り組むようになってきた。大学は教育研究から管理運営に至る組織全体の改善と向上を目的とし、国際化の目標を明確にし、その目標達成のための取組を選択し、取組実施のための基盤を整え、確実な実施に努めなくてはならない。そのためには設定した目標への到達度や目標達成のための取組の実施プロセスの検証が不可欠である。今回調査した欧州の5つの国際化の評価ツールやサービスは、国際化の自己点検・改善を目的とした自己評価を支援し、今後の国際化戦略への提案を提供する取組であった。

しかしながら、高等教育市場のグローバル化が進む中、大学が国際化の評価を実施する目的は自己点検・改善にとどまらず、その結果である大学の国際性を第三者に認定してもらい、大学のプロファイルの向上に役立てたいという第二の目的が存在することが、インタビュー調査で明らかになった。大学が望む国際性の認定とは国際性の高い大学であることを証明することである。大学の国際性（国際性の高い大学）を第三者に認定してもらうことによって、大学は国際的なプロファイルを形成し、国際的にまたは国内的に大学の評判を向上させ、学生獲得や教育研究活動において、大学の競争力を向上させたいという思惑がある。また国内や地域内での競争的資金の獲得にも大学の国際性（国際性の高い大学）を示すデータの提出を求めるケースが増えており、国際化の評価は財源確保にも有用な手段と捉えられていることも考えられる。

グローバル化が進み、国際的な活動や取組が大学の質の向上において不可欠な要素であるという認識が高まっている。また、大学の現状を社会へ説明する責任（アカウンタビリティ）において、

国際的な大学であることの証明が大学にとって重要だと考えられるようになってきている。こうした環境の変化により、第三者による大学の国際性（国際性の高い大学）の評価または認定のニーズは、今後高まる可能性が考えられる。

3.2 国際化の評価手法

大学が国際化評価を実施する主な目的は1) 自己点検・改善と2) 第三者による大学の国際性（国際性の高い大学）の認定であった。これらの国際化評価実施の目的に応じた評価手法とは何であろうか。今回調査した欧州の5つの国際化の評価ツールやサービスが取り入れていたオーディットとベンチマーキングについて考察する。

3.2.1 オーディット

高等教育機関におけるオーディットとは、「大学内部の質保証（会計監査、業務監査、そして教育や研究に関する評価）が行われていることを前提に、その一連の内部質保証の取組や手続き（責任所在、機関内の意思疎通や調整作業）の整備状況、また効果（質保証作業結果を受けて、改善され、大学の活動の質の向上に役立つ）について点検することである」（大学評価・学位授与機構 2010, p. 133）。つまりオーディットでは、大学の実績そのものよりも、実績を可能にする各機関の質保証メカニズムの整備状況とその有効性を検証するPDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクルが機能しているかどうかを点検することに重点を置いている。HRK-Audit、ISAS、AIMにおいては、まず大学が国際化の自己評価を実施し、その自己評価報告書と現場視察データを分析し、国際化の現状とPDCA（Plan-Do-Check-Action）サイクルが機能しているかを検証している。またMINTがオランダの大学に提供している自己評価の質問票にも国際化の取組と基盤支援に関してPDCAサイクルを検証する質問が含まれている。

Internationalisation Quality Review Process（国際化の質の評価プロセス）の開発を導いた一人であるKnight（2008）は国際化を「プロセス」と定義し、国際化の質の評価において国際化のプロセスを監視（モニタリング）し、継続的にそのプロセスを検証する情報を集める方法が必要だと結論づけている（p. 43）。HRK-Audit、ISAS、AIM、MINTが取り入れていた評価手法のオーディットはKnightが国際化の質の評価に必要な条件と一致する。特にHRK-AuditはRe-Auditのサービスを提供し、長期にわたって見直した国際化戦略の実施プロセスを追跡（モニタリング）する。

またKnight（2008）は国際化の質の評価において、その機関が設定した目標に対する到達度を評価すべきだと主張している。オーディットの質保証の基本原理は目的適合性であり、杉本（2009）は「ある機関の活動や質保証体制がその目標や目的（goals and objectives）にふさわしいものであるか否かを問い確認することを通して質を捉えようとするものである」と述べている（p. 7-8）。今回調査した全ての国際化の評価ツールやサービスでは第三者が設定した基準や水準に対する評価は行っておらず、あくまでも各大学が設定した目的・目標を基本としている。またHRK-Audit、ISAS、AIM、MINTでは、国際化の取組、取組実施のプロセス、質保証体制の質を検証し、今後の大学の国際化戦略へのアドバイスを提供するコンサルティングを目的としている。従って、オーディットという評価手法を取り入れ、国際化の質を捉えようとしているが、その判定は目的とはしていない。

大学が国際化評価を実施する主な目的は二つで、自己点検・改善と国際性（国際性の高い大学）

の認定であった。これらの評価サービスは自己点検・改善の目的に応じているが、第三機関からの大学の国際性（国際性の高い大学）の認定という目的には応じていない。この課題については、3.2.3 の評価の目的に適した国際化の評価手法の考察で議論したい。

3.2.2 ベンチマーキング

高等教育機関におけるベンチマーキングとは類似した機関との比較により、その機関の強みと弱みを明らかにし、機関のパフォーマンスの改善を目的とした組織的なプロセスである（ESMU⁽⁸⁾、2008, pp.16-17）。ベンチマーキングの目的は自己改善であり、改善のための自己評価が基本であるが、その評価において他者との比較というアプローチを取り入れる。今回調査した5つの国際化の評価ツールやサービスの中で、IMPIでベンチマーキングを取り入れていた。また実施には至っていなかったが、MINTとHRK-Auditでもベンチマーキングの可能性を示唆していた。

IMPIの目的である包括的な評価指標セットの開発において、評価指標セットを使用して自己評価とベンチマーキングを行っている。IMPIの二回目のテスト結果報告書“The IMPI Project – Main Findings of the 2nd Testing Phase”で、ベンチマーキングのプロセスと結果についてまとめている。本調査でのインタビュー結果にも言及しながら、大学国際化の評価においてベンチマーキングを適用する課題と利点について考察する。

まず、ベンチマーキング適用の課題と利点の考察に入る前に、どのようなベンチマーキングが実施されたのかを明確にしておく必要がある。ベンチマーキングのための基準値・水準値（ベンチマーク）をどう設定したのかを明確にすることも重要である。小林・劉・片岡（2011）は、ベンチマークにいくつかの大学の指標の平均を用いる例やグッド・プラクティス（GP）を用いる例を挙げ、ベンチマークの意味は多様であり、用いられている意味を明確にする必要性を指摘している（p. 11）。

IMPIのベンチマーキングの目的は前述したとおり、国際化評価指標セットを欧州内の大学で試験的に使用してみることであった。従って、IMPIで行われたベンチマーキングは、ベンチマーキングの実験的運用と言ったほうが正確である。具体的には、欧州の大学で構成されたベンチマーキング・グループで国際化の目標を一つ選定し、その目標を達成するための評価指標を選択し、ベンチマークを形成する。ベンチマークの形成は、グループで選択した評価指標に対してパフォーマンスが「非常に良い」「それ相当な」「向上の余地あり」という3つのレベルを各大学がその大学の目標に合わせて設定する。次に、選択した評価指標のデータを収集する。最後に、収集したデータ（過去5年間のデータ）をどのように比較し、分析できるかを検証するという手順であった。

IMPIのベンチマーキングの実験的運用は欧州の大学間で行われたが、欧州という一つの高等教育圏を形成しつつある状況においても、国境を越えた大学間で比較するという事は容易なことではないことが明らかとなった。まず、国際的に比較可能な評価指標選択における問題点について考察する。ベンチマーキングではベンチマーキングのグループ内で国際化の共通課題（評価指標）を合意する必要があるが、その課題は各国、各大学のコンテクストによって大きく左右される。例えば、ある国の大学では教育の国際化には英語を教授言語とした科目を増やすことが最重要課題である一方、他の国の大学では既に十分に提供されているため国際化推進の有用な課題となり得ない。IMPIの国際化評価指標の文献調査の結果でも、「どの指標が、実践・文化・法律上、有益なのか」を問うことが重要であると指摘している（Beerkens et al., 2010, p. 61）。ベンチマーキングの目的が自己改善であるとするれば、異なる国の大学間でベンチマーキングを行う際に共通課

題（評価指標）の選定にどこまで調整が可能なのが課題である。

国境を越えた大学間で比較する際のもう一つの課題は、比較可能なデータが収集できるかどうかということである。評価指標の選定とその定義で合意したとしても、果たして定義に合ったデータが存在するのか、または収集可能なのかという問題がある。IMPIの報告書では定義に合ったデータを収集できなかった理由として、技術的に過去に遡ってデータを集めることができなかったこと、データ収集には多数の部署の関与が必要であり、評価プロセスに参加したある一部局（国際関連のオフィス）のみではデータを収集できなかったことの2点を挙げている（IMPI, 2012, p. 8）。このことは国際的な比較において、既存の大学のデータシステムでは対応が難しいことを示唆している。また、この問題は評価指標選択の際に、指標の有用性よりもデータの有無によって指標が選択される可能性を否定できないことを暗示している。

次に、IMPIで大学間の比較をどのような方法で行ったのかを検証する。まず、評価指標の定量的データによる比較である。同じ定量的データも、絶対数、割合、成長率とどう比較するかによって、どの大学がパフォーマンスの高い大学になるかは異なってくる。例えば留学生の絶対数を比較したとき、A大学の留学生の絶対数はB大学よりも大きい。しかし、A大学の学生総数がB大学よりもはるかに大きく、留学生が全学生数に占める割合はB大学のほうが大きい。留学生の絶対数を指標とするか、留学生の割合を指標とするかで、大学の比較の結果は異なる。では、これらの指標で高得点であれば、高パフォーマンスと断定できるのか。例えば、全学生に占める留学生の割合を評価指標としたとき、その割合が20%の大学よりも30%の大学のほうがパフォーマンスが良いと言えるのだろうか。留学生の割合は20%が適当なのか、それとも30%が適当なのかは、大学のタイプやその特質に従い、大学が設定する目標と留学生に対する施策や取組によって異なる。当然、国の政策や法的基準も関係してくる。例えば、シンガポールでは国内学生の高等教育への機会を確保するため、シンガポールの大学の学部留学生の割合は20%、ポリテククの留学生の割合は10%までと規制している（Ministry of Education Singapore, 2012a & 2012b）。IMPIの報告書ではコンテキストを無視した比較は意味をなさないことを指摘している。定量的データの分析方法は多様であり、単純な比較は必ずしも国際化の実態を反映しておらず、またパフォーマンスの良し悪しは各大学の視点によって異なると述べている（IMPI, 2012, p. 9 & 12）。

IMPIでは大学の国際化のパフォーマンスを定量的データそのもので比較する他に、各大学がその大学の達成目標に合わせて設定したベンチマークを使って、二つの方法で比較を試みている。まず一つ目の方法は、各大学の「非常に良い」パフォーマンスレベルの基準値を正規化し、それに対する各大学の到達度の比較である。二つ目の方法では各大学の評価指標データを、自らが設定した「非常に良い」パフォーマンスレベルと「それ相当な」パフォーマンスレベルの基準値間で、どの程度のところにあるかを比較している。大学間で達成目標が異なる場合、同じ基準値で比較しても本当の意味でのパフォーマンスの良し悪しは分からない。各大学のベンチマークに対する到達度の比較は、同じ国際化の課題において、自らが設定した目標に対してどの大学が「成功」し、どの大学が「失敗」したのかを検証し、「成功」と「失敗」の原因を考察し、成功を導くグッド・プラクティスの情報を得る機会となり得る。ベンチマーキングにおける比較は比較結果そのものよりも、自己改善につながる多様な比較分析データを使用した他機関との議論の機会こそが重要なかもしれない。IMPIの参加大学は国境を越えた大学間でベンチマーキングすることの難しさを指摘しながらも、そのプロセスに利点があると認識している。

ベンチマーキングの利点は、他大学との比較のプロセスから得られる自己改善に有用な情報とアイデアにある。IMPIの二回目のテスト結果報告書では、参加大学がベンチマーキングから以下6項目の情報やアイデアの獲得を期待していたが、その期待が一部、または十分に満たされたことが報告されている：「他機関と比較して自大学の国際化の発展がいいポジションにあるかどうかを学ぶ」「国際化の取組をどのように拡大するかアイデアを得る」「国際化へのアプローチが主流であるかどうかを確認する」「国際化のモニターツールが適切であるか、また向上できるかを検証する」「国際化への配慮や資源を主張するために使用する証拠にする」「国際化を大学の資金配分のための指標にしようと考えている政府組織へ提案する最良の国際化指標を識別する」(IMPI, 2012, p. 10)。最後の二項目はベンチマーキングで得た情報の政策的な活用を意味している。他国の大学と比較したからこそ、大学の国際化への投資の妥当性や評価指標の妥当性を主張できるという意見であり、国際的な大学間でベンチマーキングを実施する利点と言える。

ベンチマーキングにおける比較可能な評価指標選択、また定量的データの比較の方法や比較結果の妥当性また有用性は今後の課題であるが、国際化評価の目的である大学の自己点検・改善において、ベンチマーキングの比較的アプローチは有用性が高いと言える。

3.2.3 評価の目的に適した国際化の評価手法の考察

ここでは大学国際化の評価を実施する目的「自己点検・改善」と「大学の国際性（国際性の高い大学）の認定」と今回調査した欧州の5つの国際化の評価ツールやサービスで取り入れられていた二つの評価手法「オーディット」と「ベンチマーキング」の関係について考察する。

オーディットとベンチマーキングは大学のパフォーマンスの向上を目的とした、大学の組織的学習能力の発展に焦点を当てたプロセス評価を重視している。国際化の活動や取組といった業績も検証するが、国際化の内部質保証・改善システムの整備状況や有効性といった国際化実施のプロセスの評価が重視される。オーディットとベンチマーキングの違いは、プロセス評価におけるアプローチである。オーディットは大学機関の自己言及的なアプローチを取り、ベンチマーキングは他機関との比較的なアプローチを取る。オーディットもベンチマーキングもその目的は大学の自己改善であるが、大学のパフォーマンスを検証する視点が異なる。従ってオーディットとベンチマーキングは、大学が国際化を評価する主目的である自己点検・改善において、相互補完的な関係にあると言える。オーディットで自己評価を実施し大学自身の現状を把握していなければ、他者との比較によるベンチマーキングでの実りは少ない。また、他者と比較することにより、自己言及的なアプローチによる評価では見え難い大学自身の強みや弱みを客観的に検証できる。

今回調査した5つの評価ツールやサービスでは、評価手法としてオーディットとベンチマーキングを取り入れ、大学が国際化を評価する主目的である自己点検・改善に依っていたが、副次的目的である大学の国際性（国際性の高い大学）の認定には依っていなかった。国際化の目的や目標は各大学がそのミッションや特性に従って検討するものであり、国際化の評価は合目的性を重視すべきであるという意見がインタビューで多く見られた。国際化とは各大学の目標を達成するためのその大学特有のプロセスであるという前提のもと、目標に向けて取組を実施した結果である大学の国際性にその標準は存在せず、一般的な基準や水準による評価はあり得ないという理念がある。また今回評価ツールやサービスを提供していた機関は評価機関ではないので、基本的に第三者としての評価の役割を担っていないという意見もあった。

一方、大学が国際化評価を実施する副次的目的である大学の国際性（国際性の高い大学）の認定に応えようとする取組が欧州のアク্রেディテーション機構が始まっている。2011年11月からオランダ・フランダースアクレディテーション機構（以下NVAO）が通常のアク্রেディテーションに、オプションで国際化の特に優れた特徴（distinctive quality feature internationalisation）を評価するサービス（有料）を始めた。このNVAOの動向に応じ、欧州高等教育アクレディテーション協会（以下ECA）はNVAOをはじめとする欧州11カ国の14の質保証機関、ACA、ドイツ学術交流協会（以下DAAD）と協力して、国際化を評価するフレームワークを開発し、国際化の欧州証明書（サーティフィケート）の発行を目指したプロジェクト Certificate for Quality of Internationalisation（以下CeQuInt）を欧州委員会からの助成を受けて2012年に開始した。NVAOがこのプロジェクトのコーディネーターを務め、評価フレームワークの開発においてNVAOの国際化評価フレームワークが基盤となる。

NVAOの国際化の特に優れた特徴（distinctive quality feature internationalisation）の評価はプログラムレベルと機関レベルがある。ここでは機関レベルの国際化の評価基準（表3）に焦点をあてるが、NVAOの国際化評価の対象は大学の教育機能であることがわかる。またNVAOの“Frameworks for the Assessment of Internationalisation”に国際化の取組の実現が教育の質の向上に結びつかなければならないことが明記されている。そしてNVAOの国際化評価は評価機関によって設定された最低基準の充足を評価するアクレディテーション（適格認定）ではなく、各大学が設定した目的や目標に対する達成度、またそれを可能にする実施プロセスや内部質保証システムの妥当性を評価しており、今回調査した欧州の5つの評価ツールやサービスと同様にオーディット手法の概念を取り入れている。

異なる点は5つの評価ツールやサービスでは国際化推進のための助言を主目的としていたが、NVAOでは大学の国際化の程度を判定し、認定することに主な目的がある。5つの評価ツールやサービスの提供機関は自らを大学のパートナーであると表現していたが、NVAOは評価機関であり、大学の評価者であるという違いがある。どちらも合目的性を重視し各大学が設定した目的・目標に対する達成度を評価するが、NVAOでは国際化の程度を判定するため、5つの評価ツールやサービスとは異なり、評価基準を設定している。5つの評価基準において、その目標達成度を機関レベルでは3段階（「基準に適合」「基準に一部適合」「基準に不適合」）で評価し、それを基に総合判定を行う。総合判定は「適格」「不適格」の合否判定になり、「適格」であれば証明書が発行される。

以上見てきたとおり、NVAOの取組や、それを基礎としたプロジェクトであるECAのCeQuIntの証明書は、各大学が設定した国際化の目標に対する達成度とその達成方法の妥当性の判定である。言い換えればそれは大学の努力の程度と妥当性に対する第三者の評価であり、果たして大学が期待する「大学の国際性（国際性の高い大学）の認定」と同義と言えるのであろうか。国際化戦略の実施の成功は結果的に国際的な大学、または国際性の高い大学になることを目指している。しかし、大学の策定した国際化戦略がその目標達成に向けて効果的に実施されたことの肯定的評価は、必ずしも「大学の国際性（国際性の高い大学）の認定」を意味するとは言えない。

Brandenburg & Federeil（2007）は政府や高等教育機関の国際化に関する文書において、国際化と国際性が同義的に使用されている問題点を指摘し、国際化と国際性の相違について言及している。国際性とは「国際的な活動に関する当該機関の現状、またはデータ収集時に認識できた状態」であり、国際化とは「X時点での国際性の現状からX+N時点での進展した国際性の状態への計画的プ

表3 NVAO国際化の特に優れた特徴の評価フレームワーク（機関レベル）

	評価基準 (Standards)	評価基準の定義 (Explanation)
1. ビジョン	教育の質につながる国際化のビジョンの明確化と共有	<ul style="list-style-type: none"> 国際化のビジョンは大学の国際化の抱負と一致している。 国際化のビジョンは教育の質に言及している。 教育の国際化を全学的に促進している。
2. 施策	国際化ビジョンの実現を可能にする施策。施策には最低、「国際・異文化教育の学習成果」「教育と学習」「スタッフ」「学生」の項目が含まれていること。	<ul style="list-style-type: none"> 大学の施策は評価基準にある4項目に限定する必要はなく、ビジョンに基づいたものであればよい。 適切な施策はビジョンに即した目標と実施に必要な資源について言及していないなければならない。 国際・異文化教育の学習成果が重要である。これらの学習成果は教育の質に対する国際化の効果を正確に証明する。またその結果として、学生、卒業生、また労働市場に対して国際化の妥当性を証明することになる。
3. 具体化	施策実施の程度	<ul style="list-style-type: none"> 国際化施策にある項目の実施に関する情報を管理している。 教育プログラムの質に対する国際化施策の効果に関する情報を管理している。 これらの情報は評価基準2（施策）にある取組を含む。
4. 改善計画	国際化の内部質保証システムの整備状況	<ul style="list-style-type: none"> 大学の内部質保証システムは、国際化施策にある項目を対象としている。 国際化が、内部質保証システムに影響を及ぼしている。 改善計画の一部に国際化のアプローチ（例えば、国際的なベンチマーキング、国際的なピア・ラーニング、国際的なネットワークワーキングなど）を活用している。 改善計画は、明らかに国際化活動に限られたことではない。
5. 組織・政策決定の構造	国際化に関する組織と政策決定の構造	<ul style="list-style-type: none"> 組織・政策決定の構造が大学の国際化（ビジョン、施策、具体化、改善計画）に関するすべての項目の一貫した実施を可能にしている。 組織・政策決定の構造には、任務、権限、責任が明確に定義されている。
各基準の評価	<ul style="list-style-type: none"> 基準 (standards) に適合 基準 (standards) に一部適合 基準 (standards) に不適合 	
総合評価 (判定)	大学の国際化のビジョンに基づいて、教育の質の向上において効果的な国際化施策の実施ができたかどうかを評価 <ul style="list-style-type: none"> 適格 (positive) 不適格 (negative) 	

(出典：NVAO (2011) Frameworks for the Assessment of Internationalisation を基に筆者作成)

ロセス」であると定義している (Brandenburg & Federeil, 2007, p.7)。国際化は当該機関が期待する目標に向かってのプロセスであり、国際性はそのプロセスのある時点での国際化の取組業績である。

国際化の評価とは各大学の目標に対する達成度の評価であり、X 時点の国際性と X+N 時点の国際性を検証し、その差が評価の対象になる。しかし大学が求める「大学の国際性(国際性の高い大学)の認定」においては、ある時点での当該機関の国際化の取組業績がいかに卓越しているかの検証であり、評価者である第三者による大学の国際性を測る基準の設定が必要となる。この種の評価は世界大学ランキングを想起させるが、評価者が想定する大学の国際性に関する画一的な評価指標と基準が設定されるため、そのプロファイルに当てはまる大学は国際性が高く評価され、国際化の目標がそれに当てはまらない大学は低く評価されることになる。こうした評価が機関レベルの評価に適用されると、高等教育機関の多様性に応じた国際化の発展に弊害をもたらす可能性が高い。国際性で高く評価されるための努力に励んでも、大学のミッションや特性に適さない国際化では大学の質向上の役には立たない。インタビュー調査で機関レベルの国際化の評価において、一般的な基準や水準による評価は適しておらず、合目的性を重視すべきだという意見が多かった理由はそこにある。

欧州における国際化の機関レベル評価の現状では、評価の対象は各大学が設定した国際化の目標に対する取組の達成度と取組実施プロセスや質保障システムの妥当性である。NVAO の評価も機関レベルの最終評価は大学の国際化のビジョンに基づいて、教育の質の向上において効果的な国際化施策の実施が「できた」か「できなかった」かであり、国際性に優れているかどうかを判定しているわけではない。しかしながら、NVAO の取組はその達成度を評価するだけでなく判定し、大学の国際化の取組に対する第三者の認定を望む大学のニーズに応える一施策と言える。

3.3 国際化の評価指標

国際化を評価する上で必要不可欠なのが、評価指標である。IMPI は国際化の評価指標に関する先行研究や既存の評価ツールの文献調査を行い、多様なタイプの高等教育機関が目指す、その特性を反映した国際化に対応できる包括的な国際化指標を世界の高等教育機関に提供した。

大学の国際化を考える上で、大学のどのような次元、または構成要素を考慮すべきであるかは、先行研究、また今回調査した評価ツールやサービスにおいて、共通の概念が見られる。表 4 は今回調査した 5 つの評価ツールやサービスのうち、国際化評価指標をオンライン上に公開しているものであるが、それらの国際化評価指標の大分類から、大学の機能 (教育、研究、サービス)、大学の構成員 (学生、教職員)、大学の組織デザイン (政策、組織構造、マネジメント) が国際化を促進する上で必要であると考えられている大学の次元であることがわかる。

これらの次元をどのように、またどの程度国際化しているかを検証するための評価指標は多様であり、前述したように IMPI は最も包括的な国際化指標セットを提供している。しかしながら、国際化のどの目標を達成するにあたり、どの指標を選択するのが妥当なのかは今後の課題である。その一つの取組として IMPI では、その年最も選択され、妥当性が高いと評価された年間最優良評価指標トップ 10 を発表する。今後世界の大学の利用データを継続的に収集し、より詳細な分析結果の提供が期待される。IMPI は欧州で開発されたツールであり、その評価指標のテストは欧州内の大学で実施されている。評価指標を検証してみると、当然欧州の国際化政策を色濃く反映している指標が多く見られる。今後 IMPI が世界各国の大学で利用されることにより、以下のような課

題に対する答えが見えてくることを期待したい。世界の大学で共通する有用な評価指標があるのか、または国際化の評価指標は国によって特有な傾向が見られるのか。有用な評価指標は恒常的に有用なのか、または時代と共に変化していくのか。国際化の目標達成に有用な評価指標の選択に関する研究や支援ツールの開発は今後の課題である。

もう一つの国際化の評価指標セットの課題は、評価指標だけでは大学が国際化の評価を実施することは難しいということである。評価指標は定量的な質問となり、大学が設定した国際化の目標に対し実施した取組や活動がどう進められ、目標到達にどう貢献したのか、そのプロセスを検証するには至らない。例えば、定量的な指標で留学生数の急激な増加や減少はわかっても、留学生増減の理由はわからない。それは大学が新しく国際的なプログラムを開発した結果か、国の移民政策の変更によるものかでは、その大学の国際化の質に対する評価は異なる。国際化の実態を理解するには、例えば、国際化の目的や目標の根拠や目標と目標を実現する大学の能力（キャパシティー）の関係など、コンテクストを検証する定性的な質問が不可欠である。包括的な評価指標に加え、国際化のプロセスを検証し、国際化を進める上での大学の強みと弱みを明らかにし、次の戦略の策定を導くための仕組みが必要である。

4. まとめと今後の課題

本稿では近年欧州で進む国際化評価の支援取組の調査結果から、機関レベルの国際化評価の目的、手法、指標の特徴と課題を考察した。まず大学が国際化を評価する目的であるが、自己点検・改善が主目的である。しかし、国際化が大学の質の向上に貢献すると認識され、また評価文化が定着する中、大学は国際性（国際性の高い大学）の認定を国際化評価の実施の副次的な目的として捉えている。国際化を評価した結果、第三者から大学の国際性（国際性の高い大学）を認定してもらうことが大学のプロファイル向上に役立つと考えている。国際化の評価はアクレディテーションや認証評価のように義務化された評価ではなく、大学が自主的に選択し実施する評価となっている。今後大学が国際化評価を実施する目的について調査し、大学のニーズの理解に努めると共に大学の質向上に有効な国際化の促進を支える評価の発展を今後進めていく必要がある。

次に国際化の評価手法については、国際化は各大学がそのミッションや特性を反映した目標に向かってのプロセスと定義し、その評価は合目的性を重視すべきであるという理念のもと、自己評価とピア・レビューを基本としたオーディット型評価が主流であった。オーディットは自己言及的なアプローチによる評価であり、大学の国際化の取組の妥当性をより客観的に検証するために他者との比較によるベンチマーキングの可能性も模索されている。ベンチマーキングは国境を越えた大学間で比較する際の課題は多いが、他者と比較するというベンチマーキングのプロセスから大学が国際化の現状理解と今後の計画において得るものは大きい。

大学のパフォーマンスの改善と向上を目的とした大学国際化のプロセス評価は評価フレームワークの確立に向け、国・地域・世界レベルで評価実績を積み重ねてきている。一方、国際化評価を実施した結果、第三者から国際性の高い大学としての認定を得たいという大学のもう一つの目的にどう応えるかは今後の課題と言える。現時点ではNVAOが各大学が設定した目的や目標を達成するために実施した取組の業績、またそれを可能にする実施プロセスや内部質保証システムの妥当性に対し、評価基準を設け、その達成の程度の評価と判定を実施している。しかし、それ

表4 国際化評価指標の大分類：IMPI, MINT, AIM

IMPI	MINT	AIM
1. 学生	1. 留学生のリクルート 2. 学生のモビリティ・単位互換	1. 流動性（学生・教育の国際的なリクルートと国際交流）
2. 教職員	3. 教職員の国際化	
3. アドミニストレーション	4. 国際化の基盤支援 4-1. 実質的支援 4-2. 学術的支援 4-3. 財政的支援 4-4. 社会的支援	2. 組織とガバナンス ■ 組織構造（structures） ■ 組織機関（bodies） ■ 組織主体（actors） ■ 政策意思決定のプロセス
4. 財政	4-3. 財政的支援 ■ 奨学金 ■ 助成金 ■ 申請に関する助言・支援	
5. カリキュラムと教育研究関連サービス	5. 英語または英語以外の外国語での教育 6. カリキュラムの国際化 4-2. 学術的支援 ■ アドバイス ■ 情報 ■ 準備教育	3. カリキュラム ■ 英語を教授言語としたプログラム ■ ダブル/ジョイント・ディグリー・プログラムを含む流動性を促す学修の機会 ■ 地域研究や比較研究 4. 教育の輸出 ■ ブランチ・キャンパス ■ 共同教育（collaborative delivery） ■ 遠隔・オンライン教育
6. 研究	7. 国際的研究活動 8. 知識の国際的共有	
7. 広報と宣伝活動	4-1. 実質的支援 4-2. 学術的支援	5. その他 ■ パートナーシップ・ネットワーク ■ 学生支援 ■ 情報通信・マーケティング
8. 教育研究活動以外の支援、およびキャンパスにおける学生生活や地域活動	4-1. 実質的支援 ■ 住居・宿泊設備 ■ ビザ・在住証明・労働許可書の申請支援 ■ 情報 ■ 多言語によるコミュニケーション ■ 旅行手続 4-4. 社会的支援 ■ ガイダンス ■ 課外活動 ■ 危機管理 ■ リエントリープログラム	

（出典：「Introductory Tutorial IMPI Toolbox」、「MINT webtool questionnaire」 「AIM：the ACA Internationalisation Monitor (<http://www.aca-secretariat.be/index.php?id=523>)（最終アクセス：2012年1月16日）」を基に、筆者翻訳・作成）

は各大学の目標に対する達成の程度の判定であり、国際性の優劣を判定するものではない。国際性の優劣の判定においては、評価者による画一的な評価指標と基準が設定されることになり、その結果高等教育の多様性が妨げられるという懸念や大学のミッションや特性にそぐわない国際化を促進し、結果的に大学の質の向上に役立たない可能性がある。

国際性の優劣を判定する評価が大学の質向上に有効な国際化につながるのかは、今後更なる議論が必要である。それと同時に大学の国際化の質の認定のニーズに対応する評価の在り方も今後検討が必要である。まず、国際性の評価は機関レベルでは適切ではないという見解が主流であるが、プログラムレベルではどうなのか。欧州ではチューニング・プロジェクトで専門分野別のコンピテンスと学習成果の参照基準を設定しており、この参照基準を基に国際性（国際性の高いプログラム）の認定は可能かつ妥当と言えるのか。

次に判定において、適切な評価基準をどう設定するのか。国際化プロセスの達成度、国際性の高さのいずれの評価においても、第三者が評価基準を設定する際には、国際化・国際性という課題に対して国内基準を重視すべきなのか、それとも国際基準を設けるべきなのか。仮に国際基準を設けるべきだとすれば、世界の異なるコンテクストにある大学に世界共通の評価・判定基準があり得るのか。NVAO の評価フレームワークを基礎とした国際化の欧州証明書（サーティフィケート）の発行を目指したプロジェクト ECA の CeQuInt において、今後欧州各国で同じ評価フレームワークと評価基準が実施されることになっており、評価実施結果の分析が望まれる。

最後に、国際化評価に不可欠な指標は、多様なタイプの高等教育機関での異なる国際化の目的や目標に対応した包括的な評価指標セットが開発され、大学が国際化を評価する際に大きな一助となることが期待される。しかし、500 近くある評価指標から目標達成に有用な指標の選択をどう促すかは今後の課題である。

日本においても、平成 25 年度より大学評価・学位授与機構が教育の国際化評価を開始する。この評価は欧州の事例と同様、アクレディテーションや認証評価のように大学にとって義務化された評価ではなく、質向上のために大学自らが選択的に実施する評価である。日本においても国際化が高等教育の質の向上の手段として捉えられており、各大学で様々な取組が実施されている。大学国際化の評価実績を積み、今後その在り方を評価する側と評価される側と共に議論していくことが大学の国際化の質の向上に結び付くであろう。

注

- (1) オランダ高等教育国際協力機構（以下 Nuffic）は、1952 年に創立されたオランダの高等教育の国際化を支援するための非営利組織である。
- (2) ドイツ大学学長会議（以下 HRK）は、ドイツの州立大学、または州に認証された大学やその他の高等教育機関の自主的な協会である。メンバー数は 267 校で、ドイツの高等教育の 94%以上が参加している。
- (3) ユネスコ諮問機関国際大学協会（以下 IAU）は、1950 年に創立されたユネスコを基盤とした世界の高等教育機関の協会である。120 カ国以上から 601 の高等教育機関、27 の国際的また各国の高等教育協会がメンバーとして参加している。
- (4) ヨーロッパ学術協力協会（以下 ACA）は欧州の高等教育の国際化とイノベーションの促進を目的に、高等教育における国際協力のシンクタンクとして設立された。イギリスのブリティッシュ・カウンシル、ドイツ学術交流会（以下 DAAD）、オランダ高等教育国際協力機構（以下 Nuffic）のような各国の教育の国際化を促進している主要機関の欧州の非営利ネットワークでもある。

- (5) インタビュー調査での回答者の表現を著者が翻訳した。
- (6) Erasmus Mobility Quality Tools (IMQT) プロジェクトは、Erasmus の構造的ネットワーク (Erasmus structural network) 設立のための一プロジェクトである。質の高い学生交流を特徴とする組織モデル、グッド・プラクティス、ベンチマーキング手法、評価指標を明らかにすることを目的としている。
- (7) Intelligent Manufacturing System (IMS) 2020 は、2020 年までに知的統合生産システムの確立を目指した産業界主導による国際共同研究開発プロジェクトの支援取組である。5つの主要項目を掲げているが、その一つが「イノベーション、能力開発、教育」である。
- (8) European Center for Strategic Management of Universities (ESMU) は、欧州大学の戦略的経営を支援するシンクタンクである。ベンチマーキングを取り入れた大学の管理運営や業務遂行の能力向上を提案し、実践的なワークショップを提供している。国際化のテーマでもベンチマーキングのワークショップを今後予定している。

参考文献

- (1) ACA Internationalisation Monitor (AIM) ホームページ
<http://www.aca-secretariat.be/index.php?id=523> (2012年11月10日検索)
- (2) Ashizawa, S. (2006). The process of developing evaluation indicators. In N. Furushiro (Ed.), *Developing evaluation criteria to assess the internationalization of universities: Final report*. (pp. E137-E149). Osaka, Japan: Osaka University.
- (3) Beerkens, E., Brandenburg, U., Evers, N., Gaalen, A. v., Leichsenring, H., & Zimmermann, V. (2010). *Indicator projects on internationalisation: Approaches, methods and findings*. Gütersloh, Germany: CHE Consult GmbH.
- (4) Brandenburg, U., Leichsenring, H., Lungu, I., Gaalen, A. v., Beker, R., Watts, L., & Bilanow, K. (2009), *Indicators for mapping and profiling internationalisation: Progress report*. European Commission.
- (5) Brandenburg, U. & Federkeil, G. (2007), *How to measure internationality and internationalisation of higher education institutions! Indicators and key figures*. Gütersloh, Germany: Center for Higher Education Development.
- (6) Davies, J. L. (1995). University strategies for internationalisation in different institutional and cultural settings. In P. Blok (Ed.), *Policy and policy implementation in internationalization of higher education* (pp. 3-18). Amsterdam: The European.
- (7) de Wit, H. (Ed.). (2009). *Measuring success in the internationalisation of higher education* (Vol. 22). Amsterdam: the European Association for International Education.
- (8) de Wit, H., & Knight, J. (Eds.). (1999), *Quality and internationalisation in higher education*. Paris: Organization for Economic Co-operation and Development.
- (9) Ebuchi, K. (1989). Foreign students and internationalization of the university: a view from Japanese perspective. In Research Institute for Higher Education (Ed.), *Foreign students and internationalization of higher education: Proceeding OECD/Japan Seminar on Higher Education and the Flow of Foreign Students*. (pp. 45-56). Hiroshima, Japan: Research Institute for Higher Education, Hiroshima University.
- (10) Ellingboe, B. J. (1999). Internationalizing the private liberal arts college: A comparative, five-college case study of components, strategies, and recommendations (Doctoral dissertation). Available from ProQuest Dissertations and Theses database. (UMI No. 9916427).
- (11) ESMU (2008), *A practical guide. Benchmarking in European higher education*. Brussels: ESMU.
- (12) European Consortium for Accreditation (ECA). CeQuInt: Certificate for Quality of Internationalisation. ホームページ . <http://www.eaconsortium.net/main/projects/cequint> (2013年2月16日検索)
- (13) Green, M. F., & Olson, C. (2003). *Internationalizing the campus: A user's guide*. Washington D.C.: American Council on Education.

- (14) HRK-Audit Internationalisation of University ホームページ
<http://www.hrk.de/activities/audit-internationalisation/> (2012年11月10日検索)
- (15) International Association of Universities (IAU). (2010), *Internationalization of higher education: Global trends regional perspectives – the IAU 3rd global survey report*. Brussels: IAU.
- (16) Indicators for Mapping and Profiling Internationalisation (IMPI) ホームページ . <http://www.impi-project.eu/> (2012年11月10日検索)
- (17) IMPI (2012), *The IMPI project – Main findings of the 2nd testing phase*. Retrieved on November 11, 2011 from http://www.impi-project.eu/pdf/IMPI_Findings_2nd_Round_english_2012.pdf.
- (18) Internationalization Strategies Advisory Service (ISAS) ホームページ
<http://www.iau-aiu.net/content/internationalization-strategies-advisory-service> (2012年11月10日検索)
- (19) Kerr, C. (1990). The internationalisation of learning and the nationalisation of the purposes of higher education: Two 'laws of motion' in conflict? *European Journal of Education*, 25 (1), 5-22.
- (20) Knight, J. (2003). Updating the definition of internationalization. *International Higher Education*, 33 (Fall), 2-3.
- (21) Knight, J. (2008). *Higher education in turmoil. The changing world of internationalisation*. Rotterdam, the Netherlands: Sense Publishers.
- (22) Mapping Internationalisation (MINT) ホームページ
<http://www.nuffic.nl/en/expertise/quality-assurance-and-internationalisation/mapping-internationalisation-mint/mapping-internationalisation-mint> (2012年11月10日検索)
- (23) Mestenhauer, J. A. (2002). In search of a comprehensive approach to international education: A systems perspective. In W. Grunzweig & N. Rinehart (Eds.), *Rockin' in red square: Critical approaches to international education in the age of cyberculture*. (pp. 165-213). Munster, Germany: Lit Verlag.
- (24) Ministry of Education Singapore (2012a). Undergraduate population in local universities. Retrieved on November 20, 2012 from
<http://www.moe.gov.sg/media/parliamentary-replies/2012/01/undergraduate-population.php>.
- (25) Ministry of Education Singapore (2012b). Caps on foreign student numbers at polytechnics. Retrieved on November 20, 2012 from
<http://www.moe.gov.sg/media/parliamentary-replies/2012/08/caps-on-foreign-student-number.php>.
- (26) Nilsson, B. (2000). Internationalising the curriculum. In P. Crowther, M. Joris, M. Otten, B. Nilsson, H. Teeekens & B. Wachter (Eds.), *Internationalisation at Home: A position paper*. (pp. 21-28). Amsterdam: European Association for International Education.
- (27) NVAO Distinctive quality feature internationalisation. ホームページ
http://nvaio.com/distinctive_quality_feature_internationalisation (2012年11月18日検索)
- (28) NVAO (2011). Frameworks for the assessment of internationalisation.
<http://www.eaconsortium.net/main/projects/cequint> (2012年11月18日検索)
- (29) Paige, R. M. (2005). Internationalization of higher education: Performance assessment and indicators. *Nagoya Koutou Kyouiku Kenkyu*, 5, 99-122.
- (30) Watabe, Y. (2010). Japanese approaches to organizational internationalization of Universities: A case study of three national university corporations (Doctoral dissertation). Available from ProQuest Dissertations and Theses database. (UMI No. 3403428).
- (31) 小林雅之・劉文君・片山英治 (2011) 『大学ベンチマーキングによる大学評価の実証的研究』大総センターものぐらふ No.10. 東京大学大学総合教育研究センター
- (32) 杉本和弘 (2009) 「オーストラリア大学質保証機構によるオーディット型評価－その原理・方法と新たな展開」『大学評価・学位研究』第9号, pp.3-18
- (33) 大学評価・学位授与機構 (2010) 『大学評価文化の定着－日本の大学教育は国際競争に勝てるか?』ぎょうせい

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（B）「グローバルな競争環境下における大学国際化評価に関する研究（課題番号：23330240）平成23年度～25年度」（代表：一橋大学国際交流センター教授 太田浩）の助成を受けている。

（京都大学国際交流推進機構国際企画連携部門・助教）

European Initiatives to Assess the Internationalization of Universities: Purposes, Methods and Indicators

Yuki Watabe

Abstract

Internationalization has become a central focus of higher education reform agendas worldwide. One of the key issues within this drive for internationalization is assessment since internationalization is recognized as a means to improve the quality of higher education both domestically and globally. This article will thus discuss the assessment of internationalization itself, specifically its primary issues such as purposes, methods and indicators by means of examining five recent initiatives in Europe. Both universities and service providers perceived that the primary purpose of internationalization assessment is to improve the quality of universities; however, the universities also would like to gain recognition as an international university, as the results of its assessment. The study finds that two assessment methods in particular were adopted for internationalization assessment: auditing and benchmarking. Auditing was widely utilized, while benchmarking enhanced learning but posed challenges to comparing institutions across borders. Finally, it was found that a comprehensive set of indicators was developed and is available for any universities in the world. However, further research is needed to assist universities in selecting the indicators that are most valid in accomplishing their own institutional internationalization objectives.

(Assistant Professor, Organization for the Promotion of International Relations, Kyoto University)